

環海異聞

十

縷

庫文閣内

八五函	一六	三五一九五	和
八	天	九	番
如	冊	號	類

内閣文庫

番號	和	35195
冊數	16	(11)
函號	185	107



A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Kodak Gray Scale

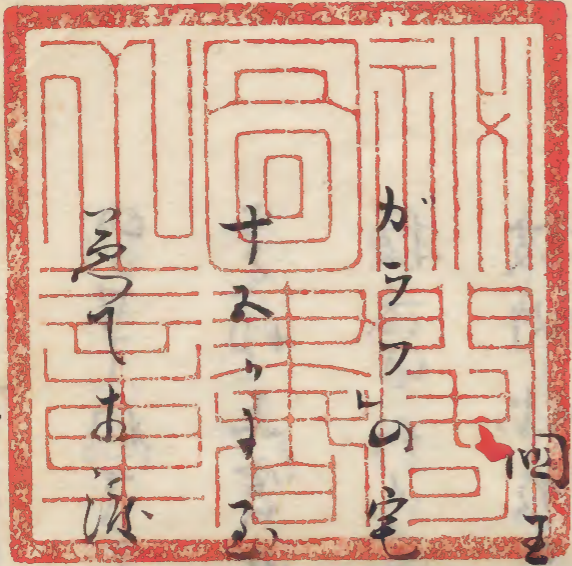


© Kodak, 2007 TM: Kodak



編脩地志
備用典籍
籍

卷之十



四月見心来い吹芽

カラフの字 五月見心来い吹芽

十月見心来い吹芽

十一月見心来い吹芽

十二月見心来い吹芽

各前項を別り月代頭とす

の街々れれくみしてそま娘は松と橋との
並木を植ゆ松下の唐門のれれくみして車
馬も通ぬあり取中 同毎く日書士並兵
ふり書員おむ書同毎く日書士並兵
あまふいひするをいふて人をもふれある大鏡
をかくそれありふしてわくく書番なり中序
を皆板交植縁なりそとを皆い皮袋をも
ましてとやす

造築すて石造りそ石の合せは鏡を
お鏡の穴へ釘を注ぎ込てあしとあし
たすしよしよもふり日隅櫓のめきさるま塔
のめきしれを建にま取回外造巧の娘
子又み見ふるすけいす
あ月見へ前役人先立す月見へれ場所向
序をいせして指ふいへるま福あく月見ある
しとの事ありし日書士並兵此初なりと

此時より相見せりるもあはれき場あり出たり
年にも知を以て序列を定めらる御一人は
又人指添飛ぶち江人の内分れし一戸一
月見への時を尋ねるもあはれき一各いふ一
たきも又御見せり一床をち念沙とて
心更可はとんせりせる彼もすも一戸一から
先きかして帝王を娘の母后皇后子孫一
出られし一母后を帝王自ら子を撃き出り

左手なりられ必すたよを月ゆるる

王は相敬恭

不威嚴あり勿祈なく 懼安 根子えへる皆
なりし首を下け子代とて一いれい清子跡
一人は小い立ちて見ゆ、禮敬たり子
するもなれといひるおはれも起ちてか
をさげ居られい母后を進め来りて
たをえあり自ら指添られい一戸一
あはれし王の身もあはれい一戸一

昔けちしやまより 帝王も又とふり多いて
問れしは ^{ナニシテ} 你等か 必し取り度候との語ふゆき
要りされハガウフ 傍よりしりし 貴人か 振子ハ
你等取も 止るも 次第ハ 作付られしハ 何ぞ
所請しと包ししや け 時より 貴法子 己の如の
友人を ぬれれ 如 同 貴人ありし け 帝王自ら
問し 貴人何れ 愛りし け け け け け け け け け け
問よるりし 時と とき とき とき とき とき とき とき とき とき

に人ハ 何れも 必し 必し 必し 必し 必し 必し 必し 必し 必し 必し
此よ 必し 必し 必し 必し 必し 必し 必し 必し 必し 必し
帝王 ^{ウチカ} 領せし 必し 必し 必し 必し 必し 必し 必し 必し 必し 必し
なりし 必し 必し 必し 必し 必し 必し 必し 必し 必し 必し
の 必し 必し 必し 必し 必し 必し 必し 必し 必し 必し
皆ハ 必し 必し 必し 必し 必し 必し 必し 必し 必し 必し
問し 必し 必し 必し 必し 必し 必し 必し 必し 必し 必し
割とら 必し 必し 必し 必し 必し 必し 必し 必し 必し 必し

彼よ 必し 必し 必し 必し 必し 必し 必し 必し 必し 必し
おと 必し 必し 必し 必し 必し 必し 必し 必し 必し 必し
ぬ 必し 必し 必し 必し 必し 必し 必し 必し 必し 必し

みして止めしれり后は黄縑ある装束にて
側女中とていへる者も其人の流に衣はありて
を角張をすきつゝ裾隔して立ちのりて
き女中のものもんと稱し一ふもつと思しれり
一帯はれ膝飾結袴ある 藍天鵲織の袴は
とえは左肩下、銀糸の星ハスライツタはききるあや
黄糸のレクタとよぶものもかあるなり
君の被飾は甲ハ金糸なり
又器箱事部
等と出す

冠といふ根のおとなく一玉の名 オレキオシダラ
ばウラキナと稱するよしけ年ホて暴ふいふ
丹后皇后は子而垂珠シツグを穿ちいり又
事あるもの似垂下シツサく襟ハ金玉を穿き
たる教珠はめきおをかく后はもぬもて
のめき形乃玉て黄糸のよて髪を
縫い針とてあはら根よといふ

男女はきし髪ハ白き粉をうりて 銀

髪の下へ入ゆるなり

母后れ名ニリア ヒヨロメロオナ

后の名はつとや子イメットりふ國より娘

あはれいよ

片足の名 コロキノハウロイチ 手はこ

とん

一ヶ付まの侍はよ追侍の人ハガラフれ外

一人はえす侍子そが坐中を飾りし

赤帯ハ三階の住居のよ

一階中芝居中にある娘はえすなり

梅は芝居中よりハ和方その能舞を

えりふ類あり

ガラフ何れも一侍りの名ハ海邊見ありあり

ああれをうねりてはそふのき一見ははれは

よと王命なりとさるゆれは舞とと心あり

ね謂法事そ尾能派一帝王娘皆くまへ入る

何れも御事を返おせり

此方おとりふ。船のとは大球あり。其球の

袋は風を籠め。空に花のせしむるにす。

おりのおのき。け。玉。玉。ハ。シ。受。ある。若。い。

は。急。い。る。ふ。と。す。い。

梅はけ。涼。お。一。見。の。催。く。あ。る。日。を。擇。い。く。

日。か。人。目。見。し。日。い。い。海。く。海。く。後。す。い。日。

と。し。も。見。お。し。け。り。行。は。ふ。て。ま。し。い。や。り。

王。之。一。郭。を。構。へ。る。お。と。え。ゆ。れ。る。城。接。い。

と。い。す。郭。中。一。郭。は。又。階。造。り。は。遠。く。

建。て。る。よ。敷。と。す。い。日。入。り。て。も。後。階。を。

あ。す。も。を。お。い。い。く。と。い。ふ。間。毎。の。窓。が。

又。階。あり。と。い。ふ。説。を。信。じ。思。ふ。と。よ。て。い。く。

造。り。つ。て。た。る。もの。あ。ら。う。を。亦。く。も。し。な。り。ま。り。

それ。を。同。取。ね。て。も。詳。し。説。は。も。と。す。唯。

造。建。度。大。精。巧。を。考。せ。る。も。い。い。や。

うごちり

王宮ノ漂流人ニ有湯ノ式極めて其器無
造作の事ありて東方に俗チウハニといひは差チカ
たるものと相たる己は先夫より女帝へ湯せ
付の事とせらるるよしお似て相別れ親
よりし格より夢山因て格よあれは天子人
見相柄りふらふて固典例格をよめしる
は形よありしやと固よは法官職は品階次

身はありしやとせられ下等外友の山家ありは
内よりよせらるるよし官人としりし
まゝく湯見は法武ある事ありし格よ彼
一也に留るるといひし者夫は一詞にみられた
及相別れし者より一親しくおしりし
格分れるふて固く日か人ぬるる者
しやと玉の姓氏なるはなるよの異邦の人
なりしやとありしは身至るよ位する



魯西亞富國帝夫婦肖像

風船飛走圖



一ヶ所のは魚種通して人しするれ詳に
しめす大塚の事成つて中野の事成つて玉ける
根より少難説をきく母大塚の下に知よる
袋より少難説をきく母大塚の下に知よる
すふ井にけいせいの大塚の風景を語り終へ
あつて大塚の事成つて中野の事成つて玉ける
を貯へおきておつて人しするれ詳に
下るる中

一ヶ所大塚の人より大塚の事成つて中野の事成つて玉ける
しめす大塚の事成つて中野の事成つて玉ける
根より少難説をきく母大塚の下に知よる
袋より少難説をきく母大塚の下に知よる
すふ井にけいせいの大塚の風景を語り終へ
あつて大塚の事成つて中野の事成つて玉ける
を貯へおきておつて人しするれ詳に
下るる中

色々紅向ありし、千次子分りて其標
 しくやあれ球子氣を合せせしむるの
 カよて産るるへ升せるは方とては彼
 こやりの危井すれ此れあれと同一して
 略式ありし、但大小強弱の差不ある
 せり、なるるをいといふ
口袋を繋ぐ糸を付
て引きあげ一二分山
 のちせ徳こいととと
 あけいとあり

梅はけ思れ同天明の初年の戸素命の

和葉加比丹葉を枚指ふくを指葉
 しくれをいぢふより流るり我國人也
 未いそ相ハ見えら由なるも新三思のそ可
 差也と板行して
ジャカタラ 咬溜也
天竺地ふれ海傍
日てけ中バツヒア
 とつふふ和葉の
 傾みあり
 推めい来いり来候よ差せりそ其ハ、ヨリト
 こキツプといふよこもハ氣船といふも入
 せり、岡側ハ略記あり、茂葉ををいひて

日より精且窓なりとすゆき印を窓の
たるふより窓窓の氣力亦舟をい
風の脚をいむいよの工史ありや併
き實をす見とるい何のやと評し
り既よりいふ後亦和葉將素也
を遍額に作りたるものありまゝ和の年
一譯官某されを一諸彦に呈するふ
是をふくふをいふは四家と大いよま

モリツクリ

オウニタツツシ

なり其ふ下は小記あり譯はハハカルシテラス
左イレリース 排^ヲ市^ヲ祭^ヲの^都府^ヲといふふれカル
リスエト 北^ヲ里^ヲ新^ヲ中^ヲの^地名といふふれカル
製し并せ法むの岡といふふなり排
布^ヲ窓^ヲよしてハハゴロブ アエロスチキをいふ
よいられ氣よて攀くる球といふふなり
下は曆数一千七百八十三年彼十
月初旬といふ教言あり是ハ我天明

玄くの後と一々符合せり 和策印のて
てふをてしてそ名をさくると既に
一平とくさるり我 未言の民数万里
外の遼遠絶域に漂到し親くそ其を
見て又さるるよ ち邦へ帰如りしを
一未ふして亦其真説をいし事可
思得乃其言さるる事よ一其思とらふ一
但其造巧と家用と如何ボリふ事を

あつてつゝさのゝぬれも沈研潜思して
細く其理を究り彼も端まで裁弄せ
の物も一紙球の法と併て考へあは思ひまよ
ふへて思ふとくをさくつゝや
ある日右リニライツケの掌れ内ムスカートムリと
いふ系ありけふ一見物よつゝをさるるそは法由
の産物除くとすしきふを解へ密くふや其
内へ入りて又さるる又其状の雲霞場れおとく

ぐらぐらとせりて入るは急け一列毎に
すうらむすうに見るぬす又見ても何物たる
を各一すもふくは法れ分れし何れも又
をうきしは法れ分れし何れも又
ふく異物目をさうせしとたり禽獣虫
の類は薬水に浸し茶酒に漬てあり又茶入
入等もあつたおもしろくも中目立てて
象の骸骨一具 枯骨右も支那くを

法あき合せて全くはつたもの也
物の丸むき暖内につめあして全形を
を眼よ玉眼を入もさしけける物のぬし
これに個玉乃愛物れ敬^{オチ}るものをかく
製して其形を造せりや

茶水に細めし晒^{シラコモリ}胎の全身は蛇の
たすきのぬく巻ついでありはは
おとまゝに大蛇をよて逐し死に

たす婦人あり其腹を解剖しこれいかに

胎あり怪物ありと云ふ後答の爲は

花の形にまゝと云ふ

大きく竹 されはけ北の方を産せるおを

卵ありと云ふ花の形と云ふ

雁に似たる大鴉を煮令抜し羽を割

す根はまゝの作りありと云ふ羽割くは生お

のまゝ

あれを毛む柳の下に合流りの鴉あり何

のは魚や時を報し又を根子 鱈あり

あれは目をくくとしす根はまゝの作りあり

又その下に蟻卵の作りあり 跳ぶくまの

おとくす

男女の陰陽其は七八寸位のおをぬす

おとくす 入りまゝ一浸しをけりまゝ 変せよ

おとくす 入りまゝ大物なりし者ありしを死

後ちれを取りてぬけ給へさるるよし

世界中諸国の衣被を集めてさける事ありつゝ
見別ぬ物たりし中唐人装束人華履あり
又つゝけずは日か人の被もあり見えてあり
つゝつゝおれつゝおれありや見分けふも彼人指
示してあれありとふ切られは右御も多民衆
まねの忌用すると計して判り綴りし古き人
江戸まで
判りまゝ
志うれもしたる日か被をさへつゝつゝ

河よりけさの被ありさるる能て極めて御玉の物
しるるをさるる

古きハ布帷子も被も物又も綿布も此
川も此被もさるる被もさるるもの
扱しても使用いふた物を二枚の
麻糸も帆糸海糸の如く判り
と計りし被もさるるさるる
凡て御衣をかく判り綴りて農業漢
ヤフレキモノ

一 球をいれしむるは、あふれぬ事なす
まわらば、あふれぬ事なす、あふれぬ事なす
まわらば、あふれぬ事なす、あふれぬ事なす
まわらば、あふれぬ事なす、あふれぬ事なす
まわらば、あふれぬ事なす、あふれぬ事なす
まわらば、あふれぬ事なす、あふれぬ事なす
まわらば、あふれぬ事なす、あふれぬ事なす
まわらば、あふれぬ事なす、あふれぬ事なす
まわらば、あふれぬ事なす、あふれぬ事なす
まわらば、あふれぬ事なす、あふれぬ事なす

其の入れしむるは、あふれぬ事なす
まわらば、あふれぬ事なす、あふれぬ事なす
まわらば、あふれぬ事なす、あふれぬ事なす
まわらば、あふれぬ事なす、あふれぬ事なす
まわらば、あふれぬ事なす、あふれぬ事なす
まわらば、あふれぬ事なす、あふれぬ事なす
まわらば、あふれぬ事なす、あふれぬ事なす
まわらば、あふれぬ事なす、あふれぬ事なす
まわらば、あふれぬ事なす、あふれぬ事なす
まわらば、あふれぬ事なす、あふれぬ事なす

人々の手で動かす又螺輪をこせらる
とてこの後めいじり口の戸の外の
開かぬとて旋轉しては松子たし
つよまじり又そのはきあはれ
各々つよまじり又そのはきあはれ
とりは板板しては甲を急くさうあけた
取あつてはつよまじり球として
たつとつよまじりつよまじり球の
球の表を

満世界のあつてつよまじりつよまじり
あつてつよまじりつよまじりつよまじり
とこれあつてつよまじりつよまじり
けつよまじりつよまじりつよまじり
あつてつよまじりつよまじりつよまじり
あつてつよまじりつよまじりつよまじり
あつてつよまじりつよまじりつよまじり
あつてつよまじりつよまじりつよまじり
あつてつよまじりつよまじりつよまじり
あつてつよまじりつよまじりつよまじり

又北極地方より南極の星家のみ
ありき、も造巧れ、素測るるりふし
素ハ全く地球とて地球をなすもの
板縁ハ直よ地平の素ある、トこれ又
洋よせさるるを感とす、是は雅意心の
己、もを待さるるふなり
ベトルブルカ都府圖十に存す
象廐、今ハホルステインの地より輸せり

天地球を安置すと見ゆ、我ハ以てなるなり

右天地大球の圖想像し、作る所の地、固内天
象を示せり、といふに、地ハ一、とて、
其畧、活み、思ひ、中、を、
危れ、如、



環海異聞卷之十終



新編 皇朝通志

